

前回に引き続き、動物名を冠した古墳を紹介します。今回は「狼塚古墳」です。この古墳は大鳥塚古墳の東側で新たに見つかったため、字名「狼塚」から狼塚古墳と名付けました。住宅建設の折、埴輪が見つかり、発掘調査を実施したところ、円筒埴輪がコの字状に、さらにその内側には2列の形象埴輪列が見られ、水鳥形埴輪の破片が出土していることから、水鳥形埴輪が並んでいたと推定できます。

調査した部分は幅12m、長さ6mを測る造出しであると判断しました。墳丘部については不明なところが多いですが、旧地形や等高線、埴輪が出土した場所などから直径約28cmで、西側に造出しが付く円墳であると推定しています。

造出しが墳丘にとり付く部分には、長方形の柵形埴輪をコの字状に並べて囲むもので、円形埴輪とも呼ばれています。一辺約1・2mとわ

が国最大の四角形の区画を作って導水施設を表現していました。その中心部の表面には3×4cmの玉石を敷いた上にひしゃく状の木樋形土製品が据えられていました。

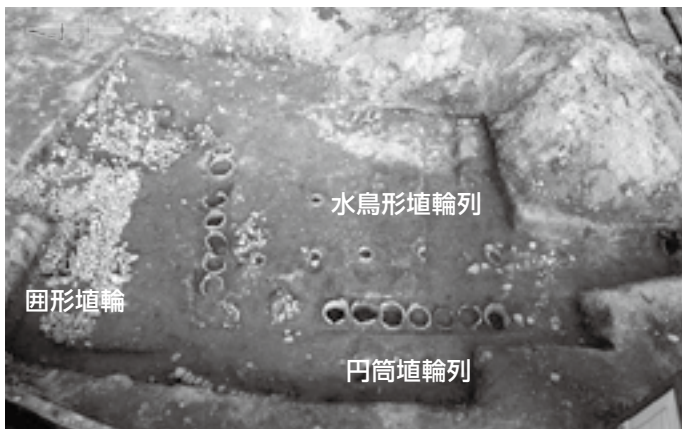
なお、柵形埴輪同士は、基本的には隙間はありませんが、木樋形土製品の先を延長した部分は、約10cm程度の隙間が開いています。これは水を流すことを表しているのでしょうか。

出土した円筒埴輪はすべて窖窯焼成で作られた直径30cm前後の大型品で、底部はすべて打ち欠いています。円筒埴輪の特徴から、応神天皇陵(菅田御廟山)古墳と同時期の5世紀前半に築造されたと考えられます。造出し部分から出土した円筒埴輪が底部をすべて欠いて、高さを低くしていることから水鳥形埴輪を見られるように工夫していると思われる。

形象埴輪には柵形、盾形、水鳥形、鶏形が確認されました。円形埴輪

の詳細については、令和4年12月号に掲載しているためここでは省きますが、南西部の柵形埴輪には入口があり、その上には天蓋がついていた可能性を指摘しておきます。浄水儀式を行うために高貴な方が出入りする様子を表現したのでしょうか。

最近、盾形の鏡や長大な蛇行剣が出土して盛んに報道されている富雄丸山古墳(奈良県)は、時期も大きさも異なりますが、狼塚古墳と同じ造出し付き円墳です。さらに、両古墳で円形埴輪を使用した導水施設を表す埴輪が出土していることから、両古墳の重要さがわかります。



▶ 狼塚古墳調査区全景(西より)

### 古市古墳群の動物を冠する古墳3 狼塚古墳

「狼塚」という字名の由来については、良くわかっていませんが、位置的にも、時期的にも応神天皇陵(菅田御廟山)古墳の陪塚の可能性が考えられます。わが国最大の円形埴輪を据えて、それが浄水を得るための廠かな空間を表していることから考えると、狼塚古墳には、応神天皇陵(菅田御廟山)古墳の被葬者と関連がある、浄水儀礼を司った人物が葬られていた可能性が推定できるのではないのでしょうか。

(文化財保護課 上田 睦)